イ・ヨンスの

異像画集

韓国キリスト教エデン聖会宣教財団

イ・ヨンスの
異像画集

発 行 日　2014年6月30日 日本語版初版印刷
著　　者　イ・ヨンス
絵　　キム・ドヨン
写　　真　エデン聖会写真部
デザイン　ナ・ヒョンミ
編　　集　ユン・サンハク
発 行 者　財団法人韓国キリスト教エデン聖会宣教財団
住　　所　京畿道加平郡清平面クンメコル路189
お 電 話　031-581-5005

info@holyedenchurch.org
http://holyedenchurch.org/jp

ISBN 979-11-951768-2-3 (03230)
非売品

ⓒ この本の全ての絵と内容に対する著作権は財団法人韓国キリスト教エデン聖会宣教財団の所有です。この本の内容で二次著作物をつくりたい団体および個人は必ず上記の著作権者と事前協議が必要です。

はじめに

この異像(ヤハウェ様が見せてくださる霊的な場面)画集をご覧になる皆様に申し上げます。それぞれの異像画毎に、異像を啓示によってお見せくださった年月日を記録してあります。神ヤハウェ様がこの光景をお見せになられて仰せになった時には、「今あなたが見たことを人々に話しても信じてくれる人は誰一人いない。しかし、時がくれば多くの人々が、私があなたに見せて聞かせた幾多の光景と話を信じるようになる。だからその時が来るまでは一切口を閉ざして大事にしまっておくように。」と仰せになったので、私自身もその時がいつなのかいつも気になっておりました。

そんな折、ヤハウェ様がアルゴク聖殿を建てなさいと仰せになり、今のようにアルゴク聖殿の規模がある程度整いました。それで、霊的な光景を世の人々にお知らせする時が来たと判断し、心の準備をして公会堂ホール(「文化の殿堂」)の内部に展示する異像画を準備しながら、世の中の全ての人々に神の経綸をお伝えするために異像画集を発刊することになりました。

この異像画集の中の内容は省いたものも付け足したものもなく、純粋に真実をそのままに啓示による異像の中で見聞きしたものを叙述したということを読者の皆様に申し上げます。これらの光景をご覧になる読者の皆様に主ヤハウェ様とイエス様が聖霊によって感動を下さることを信じております。

読者の皆様はこの異像画集をお読みになる際に、胸が熱くなったり、喉がスウスウしたり、口の中に甘さが感じられた時や、頭の上からポツポツと露雨のようなものが落ちてきたり、また涼風が吹いてくるような感じがしましたら、それはイエス様がこの写真の光景が事実だということを証明して下さるために聖霊をお送り下さるものと認識してください。

2013年12月

イ・ヨンス

目次

ヤハウェの世界に関連する異像 3

初めてのヤハウェ様拝謁、二度目のヤハウェ様拝謁、至聖所の預言者たち

悪魔の世界に関連する異像 14

悪魔の脅迫、祭祀を受ける大王悪魔

聖書に関連する異像 26

エデンの園、カインに授けられたしるし、イエス様の苦悩、パンと魚の奇跡、苦難を受けられたイエス様、亡くなられたイエス様、小羊の婚宴式場、裁き、天国と地獄の光景

オリーブの木に関連する異像 42

初めて見た異像、原始生活、汝矣島復興会の後、先の僕(しもべ)の霊的地位、天使と果物、栗の収穫、葡萄の収穫、嘆くオリーブの木、祝福の御言葉

その他の異像 62

ヤハウェ様の御言葉、イエス様の御言葉

勝利者イ・ヨンスに対する編集者の証言 78

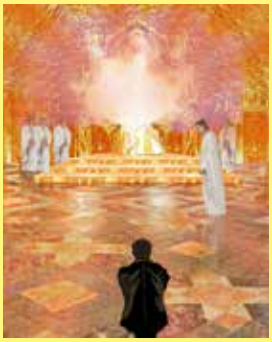
アルゴク聖殿とその附属の建物 84

地方教会 87

エデン聖会関連書籍 88

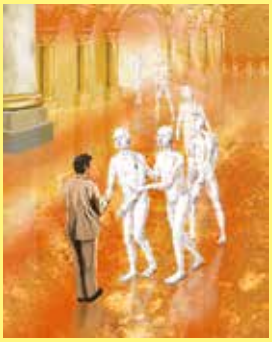
ヤハウェの世界に関連する異像

初めてのヤハウェ様拝謁



二度目のヤハウェ様拝謁

至聖所の預言者たち



霊の世界にいらっしゃるイエス様

初めてのヤハウェ様拝謁 (1970年4月)

1970年当時の著者

私が1968年4月に伝道館(一番目のオリーブの木が建てた教会)の伝道師を休職し、1970年4月、　石串(ソックァン)洞に住みながらサムイル産業社という会社を運営している頃だった。

ある日、仕事を終えて帰宅して寝ていたところ、異像の中にいきなりどうしてか若い美男子が微笑みながら近寄ってきて、「私はあなたに会いに来た。」と言った。私がどちら様ですかと尋ねると、「ナザレのイエスだ。」と仰った。私はとても驚きながらも嬉しくて、「どのような理由でお越しになったのですか。」とお伺いすると、「私と一緒に父のもとに行くのだ。」と仰いながら私の手を優しく握られた。イエス様の手はとても暖かくて柔らかかった。

イエス様の姿は普段絵をみながら想像していたものとはまったく違っていた。イエス様は私より7cmほど身長が高かった。イエス様の顔の線は丸みを帯びていらっしゃる方であった。目は一般の私たちの目は細長いのに比べてイエス様の目はそれより若干丸く大きくていらっしゃった。瞳は黒と青色でいらっしゃった。髪の毛はそれほど長くなく、髪の毛の色は黒でありながらも若干赤っぽい感じもあられた。

イエス様が私の肩に片手をそっと当てて、「私の手をしっかり握るのだ。」と仰った。その瞬間、私の体はイエス様の手を握ったまま空中に浮かび上がった。怖かったけれども不思議な感じで下を見下ろしてみた。街の姿がどんどん遠くなりイエス様と私は雲の中に入ったのだが、恐怖を感じ緊張した。

著者に会いに来られたイエス様

私が怖がっているとイエス様が、「私の手をしっかり握りなさい。」と仰り、イエス様の手をよりしっかりつかみながら、使徒行伝に出てくるイエス様の昇天の場面が思い浮かび質問を申し上げた。「イエス様、イエス様が復活し天使たちと共に空に上がっていかれた時も今のように行かれたのでしょうか。」イエス様はそうだとお答えになられた。下を見下ろしてみると、とても遠く離れてみえる家や建物が雲の間から小さく見えた。当時、私は飛行機に乗ったことがなかったのでより恐怖感を強く覚えた。そのままかなりの間飛んでいるとイエス様が、「これから陰府を通過する。」と仰りながらもう一度、「私の手をしっかりつかむのだ。」と仰った。その時までは陰府というものは土の中にあるものだと思っていた。しかし、空中にあるということを初めて知ってとても不思議な感じがした。私はしっかりイエス様の手を握った。その瞬間急に目の前が真っ暗になった。体から2メートルくらい離れた所から沢山の黒い手が出てきて私をつかもうとしていることを感じ、とても緊張した状態で速い速度で暗闇の世界を飛んでいった。

かなり長い間飛んで真っ暗闇の陰府を通過した後、目の前が急に明るくなりまぶしくて目を開くことができなかった。ゆっくり目を開くと宮殿のような華やかな所で私は跪いていた。私がいた所から30メートルほどの先に大きな玉座があり、玉座の両側には天使たちが立っていた。私から見ると右側で、玉座にお座りになられている方からご覧になると左側なのだが、そこにイエス様が両手を前にそろえて丁寧な姿勢で立っていらっしゃった。続いてイエス様が玉座に向かい、「私が選んだ勝利者です。」と申し上げられた。その御言葉を拝聴した瞬間、玉座にヤハウェ様がお座りになっていらっしゃるということに気づいた。

溶鉱炉の煮えたぎる鉄の湯の上に赤々と燃えるような光がヤハウェ様の上半身を視界から隠していた。その中から御声が聞こえた。「あなたの名がイ・ヨンスだな。」と仰せになり、顔を上げよと仰られて恐る恐る顔を上げて玉座を見上げた。ヤハウェ様の姿を見ようとしたが、炎のような光がとても眩しくてその姿を見ることができなかった。玉座で御声が聞こえた。「私があなたにやるべきことを指示する。」と仰り、私の使命について御言葉を下さった。

イエス様と共に主ヤハウェ様の世界に行く場面

神の玉座の御前

ヤハウェ様の御言葉が終わられてから、隣に静かに立っていた天使たちに、「これから出来上がる聖なる都を見せよ。」と指示なさった。即座に、二人の天使が私のそばに来て両側で私の腕をつかむと、私はあっという間に遠い距離を移動し、いつの間にか目の前には大きくて盛大な建物があった。その中には果てしなく長い廊下があり、それは艶やかに輝いていた。廊下の右側には部屋が数え切れないくらい沢山あり、部屋の入り口には表札があった。

部屋の中に入ってみると、広さは30坪くらいで中は宝石のような豪華な素材で出来ていた。奥のほうには大きな机があり、真ん中には少し小さめの机があった。扉の方にはもっと小さい机があったのだが、三つとも燦爛たる金細工と宝石で装飾されていた。この無数の部屋は今後十四万四千人の王たちが執務をするのに利用する場所だそうだ。私は、「なるほどこれがこれから創られる聖なる都なのか！」と思った。(黙示録21：10参考)

二度目のヤハウェ様拝謁 (1974年1月)

1974年当時の著者

エデン聖会を始めて間もない時、異像の中でヤハウェ様の玉座の前に再度お伺い申し上げることとなり二度目の拝謁となった。ヤハウェ様が地上の状況についてお尋ねになられた。私が地上の状況について申し上げると、ヤハウェ様は私にどうすればいいと思うかとお尋ねになった。私は一番目のオリーブの木の草創期に比べ人々が悪に満ちていて治めることが難しいため、より大きい権限をくださることをお願い申し上げ、ヤハウェ様はその話をお聞きになって、「あなただけが知って実行せよ。」と仰せになられた。

続いて主ヤハウェ様が私に前のほうに出てくるように命ぜられ玉座の方に進み出たのだが、私から見ると左側で、ヤハウェ様からご覧になると右側に1メートル程の高さのテーブルの上にバスケットボールの大きさくらいで、色鮮やかな真珠の玉のようなものがあった。ヤハウェ様が、「宇宙は途方もなく広大で一目で見る事ができぬゆえ、その中を覗いてみるといい。」と仰ったので、中を覗いてみた。丸い真珠の玉のようなものの中に銀河系が見えた。あるものは細長く、あるものは丸く、またあるものはドーナツのような形をしていた。当時はそれが銀河系だということは知らなかった。歳月が過ぎ、科学者たちが宇宙を撮影した写真を報道するようになってから銀河系の写真をみることが出来るようになったが、それは私がヤハウェ様の前で真珠の玉のようなものを通して見たものと同じで感慨深く、一方で予めヤハウェ様が宇宙の途方もない広大さとその神秘を教えて下さったことをありがたく思った。ヤハウェ様の玉座の前で天使たちに囲まれて私はこのように宇宙の神秘を体験したのだ。

ヤハウェ様がバスケットボールぐらいの大きさの真珠の玉のようなものを通して宇宙をお見せになり、
その宇宙の途方もない広大さを御教え下さる場面

亜麻布を着た預言者たちと挨拶を交わす場面

至聖所の預言者たち(1972年)

1972年当時の著者

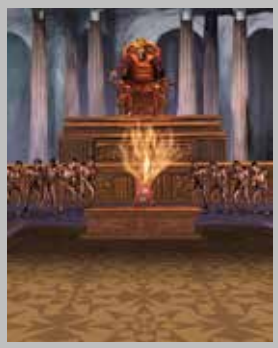
深夜1時から3時の間、異像の中で主ヤハウェ様の世界にある至聖所に行き、天の国で最高の地位を持つ預言者たちに会い握手もして会話も交わした。預言者たちは亜麻布を着ていて、亜麻布は私たちが着たり脱いだりするような服ではなく、私たちの体の皮膚のように体の一部であるようだった。亜麻布はガラスの粉をまいた水銀が太陽の光に煌くように光っていたが、まるで亜麻布を着た預言者たちは人造人間のような姿だった。

私が預言者たちと握手をしたり挨拶をしている時、その中の一人が自分がモーゼだと言うので彼に質問をしてみた。「聖書の内容であなたが地上にいる時にヤハウェ様の後ろ姿を見たと書かれてあったのだが、天国でヤハウェ様に謁見するのと地上でヤハウェ様に謁見するのと比べて感想はどうですか?」しかし、私の質問を聞いたモーゼは返事をしなかった。

悪魔の世界に関連する異像

悪魔の脅迫

祭祀を受ける大王悪魔



悪魔の脅迫(1971年8月)

1971年当時の著者

1971年4月、イエス様よりオリーブの木としての使命を賜ってから数ヶ月後、二匹の悪魔が私の所にやって来た。次の絵は私の所にやって来た二匹の悪魔のうちの一匹の姿だ。

悪魔の外見は若干恐ろしく感じられた。角の長さが5センチぐらいあり、目尻がつり上がり、耳はロバの耳のように大きく、裸の上半身は筋骨隆々としていた。彼の手の指は三本で、60センチ程の尻尾があり、脚はヤギの脚のような格好をしていて蹄は踵が二つに割れていて、歩く時は尻を突き出してよたよたと歩いていた。悪魔の音声は少しハスキーで、私が彼らと話す時は人間と話しているような雰囲気だった。

悪魔たちが私にイエスの何が良くて従うのかと言いながら、「イエスは2千年も前に俺たちが十字架に釘で打ちつけて殺した。」と言った。悪魔が十字架にかかったイエスを見てみるかと訊いたのでそうすると答えると、映画館のスクリーンのようなものが急に現れ、そこにはイエス様が十字架に釘で打ち付けられた場面が写っていた。悪魔が、「見ろ、俺たちが殺したイエスだ。それでもイエスに従うのか。」と言ってくるので、私は何一つ返事をしなかった。

悪魔が再度言った。「お前がイエスを捨てたら何でもしてやろう。お前はイエスが凄いと思ってるようだが俺たちのほうがもっと凄いぞ。俺たちの能力を見よ。」遠くにマフラーをまいた女性がいたのだが、「黄色くなれ。」と言うとそのマフラーは黄色になり、「赤になれ。」と言うと赤く変わった。「見ろ、これでも俺たちについて来ないのか?」と言い、またも私が黙っていると、悪魔たちはそのまま去っていった。

著者に会いに来た
二匹の悪魔の内の一匹の姿

二匹の悪魔が著者に、自分たちがイエス様を処刑したと言い、
イエス様を捨てるように誘惑する場面

数日後、同じ悪魔たちがもう一度やって来て再び誘惑したが私が応じないでいると、「こいつは言うことを聞かないから大王様の下に連れて行こう。」と言い、私の両腕をつかむと、私を連れて行った。道を行きながら二匹の悪魔がお互いに話をしていた。「こいつは勝利者だから俺たちが勝手に手出しすることはできないだろう。大王様の下に連れて行こう。」と言った。私は悪魔たちに率いられて悪魔の世界に辿り着いた。

著者を自分たちの世界に連れて行く二匹の悪魔

大王悪魔から
権勢を受け取った偶像

大王悪魔の王座の前で

そこには身長が30メートル程に見てとれる、黒目がバスケットボールくらい大きい偶像がいた。偶像が目を丸くして私の顔を見下ろしながら、「ここがどこかを知っていて堂々と立っておるのか？」と怒鳴った。どれだけ声が大きいのか、周囲にグワングワンと響いて耳が痛いくらいだった。しかし、二匹の悪魔が私を連れてくる時に、「こいつは勝利者だから俺たちが勝手に手出しすることはできないだろう。」といった会話を思い出して、『お前たちは私に危害を加えることはできないだろう。』と考えると偶像を正面から堂々と見据えた。すると偶像が、「こいつを大王様の下に連れて行け。」と言い、二匹の悪魔は私の両脇に腕を巻き再び私を連れて行った。

地上での時間で30分程連れて行かれたように感じられた。暗くて大きな建物の中に連れて行かれてみると、雄大な建物の中には雑事をする悪魔たちもいた。そこに人間の姿をした大王悪魔が私を見下ろしていた。私を連れてきた二匹の悪魔が、「ここをどこだと思っておるのだ？跪かぬか！」と強引に跪かされた。

王座に座り著者を
見下ろしている大王悪魔

奇妙なのは大王悪魔が一言も発することなく5分程ただ私を見下ろしていたことだった。私はなぜ大王悪魔が人間の姿をしているのかと疑問に思った。大王悪魔は頭には威厳のある冠を被り、上品な姿勢で鎮座していたが、その姿は神秘的に見えた。
私はここにずっといたらどんな目に遭うか分かったものではないという気がして、機に乗じて渾身の力を振り絞ってその場を脱し逃げ出した。後ろからは悪魔たちが追い掛けながら、私に向かって槍を投げてきて、槍は耳元をかすりながら風を切って飛んでいった。
私は逃げる道すがら気力が果てて倒れてしまった。これでもう死ぬんだと思いイエス様の御名を叫ぶと、その時、急に目の前に眩い光が差し込み悪魔たちは逃げ去った。とても逃げきれなかった悪魔たちはまるで真夏の太陽の光に晒された雪だるまがどんどん溶けていくようにその体は溶けて崩れ落ちた。その瞬間、光の中で白くて長い服を着たイエス様が姿を現されて、「もう分かったか。人間の力では手下の悪魔一匹にも勝つことができないのだ。」と言い残されて姿を消された。
異像から醒めてみると全身が汗まみれになっていて、正気を取り戻そうとしている時には、聖霊がざあっと慈雨のように頭に降り注いだ。

イエス様が光の中より現れなさって
悪魔を追い払う場面

祭祀を受ける大王悪魔(1972年4月20日)

異像の中で悪魔の世界にもう一度行ってみることとなった。大王悪魔の前には香炉があり、そこからは香炉の煙が立ち上り、大王悪魔がそのすぐ前に座っていて地上で偶像を崇める者たちの栄光を受けていた。その時、煙の中から声がきこえてきた。地上で木魚を叩きながら雨を降らせてほしいという祈り声だった。その声を聞いていた大王悪魔が、「その地を受け持つものは誰だ。」と言った。一匹が前に出て、「私です。」と言うと、大王悪魔が、「行って助けてやれ。」と言った。するとそいつは稲妻のように飛び去った。

私がこの光景を見ていると、大王悪魔が私を見て、あやつがまた来おったと言いながら捕らえよと叫んだ。すると大王悪魔のそばに立っていた一匹の悪魔が、「父上、私が行ってあいつを捕らえて参ります。」と言って追いかけて来た。それで私は、『はっ！世界のすべての権限を受け取ったといって主イエス様を苦しめ誘惑したのがあいつなのか。』ということが異像の中で直感で分かった。その悪魔は細長くて先が尖った奇妙な形をした槍を手にして追ってきた。『まずい、ここにいては死んでしまう。』という気がして逃げ出した。

槍をもった手下の悪魔たちが先に近づいてきたが、その時イエス様の御声が聞こえた。「あなたが手に持っているものは何だ？」私が手を見ると、いつの間にか私の手には権能の棍棒が持たされていた。主イエス様が、「それで相手を打て。」と仰った。その棍棒を近づいてきた悪魔たちの頭に振り下ろすと悪魔は、「ギャッ」という声を出して皆倒れこみ、私の手に握られた棍棒は初めよりも大きくなっていた。内心、悪魔をあと数匹打ちのめして棍棒がどんどん大きくなったらどうやって手で持っておけばいいだろうかと心配しているうちに異像から目が覚めた。全身が汗でびっしょり濡れていた。もうすっかり部屋は朝日が差込み眩いほどで、寝床から立ち上がろうとした時には聖霊が慈雨のようにざあっと降り注いだ。

地上よりあがってきた祭祀を受けて
助けてやるように指示する大王悪魔

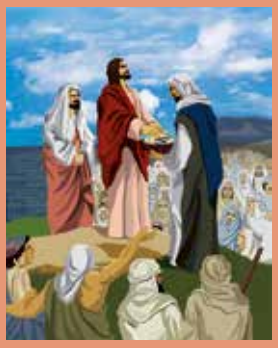
聖書に関連する異像

エデンの園

カインに授けられたしるし

イエス様の苦悩

パンと魚の奇跡



苦難を受けられたイエス様

亡くなられたイエス様

小羊の婚宴式場

裁き

天国と地獄の光景

エデンの園で川に体を浸している著者

エデンの園(1970年5月)

暖かい春の日に、小さな園を散策していると、そこには川があり、川のそばには小さな丘が幾つか集まっていて様々な花々と低めの草木があった。川上の方の深さは足首くらいで幅は20メートル程で、水の中には砂利が敷き詰められていて、水がきらきらと輝きながら流れているせせらぎは、それはそれはとても美しいものだった。小川は下流の方にいくと深くなっていくが、その幅は寧ろ狭くなっていった。私はあちこち歩き廻って木の枝に引っかかり左手の手首を怪我したが、川の水に入って体を浸すと手首の傷がすっかり治って不思議だった。これがエデンの園の神聖な川なのだなと思った。そして昔アダムはどんな顔をしてどのような生活をしたのだろうかと気になったが人や獣の姿を目にすることはなかった。

目を開き気がつくと異像の中でアダムや獣に出会えなかったことが残念だった。なぜアダムをお見せくださらなかったのか考えてみると、聖書に主ヤハウェ様がアダムを御創りになられた時、主の姿形に似せて創られたと書いてあったので、私がアダムを見ることになれば主ヤハウェ様を拝見することと同様なのでお見せ下さらないのだろうと思った。

カインが人々に危害を加えられないように、神ヤハウェがカインに直接下さった馬牌のようなしるし

カインに授けられたしるし(1975年7月13日)

1975年当時の著者

深夜にお見せくださった異像だ。ヤハウェ様がアベルの祭祀はお受けになられたが、罪を犯したカインの祭祀はお受けにならなかった(創世記4：4-6)。その時、カインは悔しさを堪えきれずに弟のアベルを野原で叩き殺してしまったのだが、(異像のうちには)野原の遠くに幾らかの人々が見えた。主は弟を殺したカインを呪われて、地上の放浪者となるだろうと仰られた時、カインは後悔しながら他の人々に危害を被る事を恐れた。主は他の人々からカインを守ってやろうとお約束なさり、その証拠としてしるしを授けられた。そのしるしは丸い銅板で、直径20センチくらいに見え、表にはケルビムが描かれていて、裏には動物の絵で構成された象形文字が刻まれていた。動物の形状ははっきり覚えていないが、『この人に危害を加えるな。』という意味だろうと思う。

20代の時のイエス様

イエス様の苦悩(1970年4月)

20代のイエス様は父ヨセフの大工の仕事を手助けなさいながら、時々十字架にかからなければならない自分の行く末をお考えになりながら憂鬱な思いをなさっていた。異像の中で、イエス様は仕事を終えて部屋に入られてからご自分で御作りになられた机の上でイザヤ書を開かれてお読みになられた。

机は丸太を半分に切り分けて広い面が上を向くようにして何枚かを横に並べて御作りになり、イザヤ書を記録した本はとても大きくてぶ厚く、羊皮紙で作られてあった。

イエス様は本の上に肘をおいて机に寄りかかられて、今後の行く末のことを御心配なさり主ヤハウェ様にお祈りなさった。私もイエス様が苦悩なさった頃と同じ年頃に伝道師の発令を受けたので、その年頃のイエス様の苦悩なさる姿を見て色んな感情が錯綜した。

パンと魚の奇跡(1976年9月3日)

1976年当時の著者

聖書の五つのパンと二匹の魚の奇跡に対してその内容がどのようなものなのか質問を申し上げたところ、イエス様が異像の中でその光景をお見せ下さった。

弟子の内の一人が二匹の魚と五つのパンを持ってきた時、イエス様が弟子たちに指示なさった。「籠はどこにあるのだ？早く立ち上がって籠を手に入れてきなさい。」

弟子たちは四方に分かれていき、しばらくすると色々な大きさの籠を持ってきた。十二人の弟子と一緒に他の人たちも行動を共にしたが、探し物をしながらも疑念を持った表情が彼らの顔に赤裸々に表れていた。

イエス様が魚とパンをもってくるように仰せになった時、ペトロがそれらをざるに入れてイエス様に持って行くと、イエス様がざるの上に両手をそっとおいて祝辞を述べられた。この時私が見たところ、ペトロはイエス様より背も高く体格も良さそうに見えた。

イエス様が祝福をなさった後、弟子たちに仰せになった。「これを皆に分けてあげなさい。」弟子たちが最初にもらったのは幾らもなかった。それを弟子たちがそれぞれ籠に入れる瞬間、弟子たちも知らないうちに籠には沢山の量が盛られた。弟子たちはそれがどこから現れてどのように増えたのか分からなかった。イエス様が、「分けてあげなさい。」と仰ったのでそれぞれ自分の籠を持って行き皆に分け与えた。そのパンを分けてあげる時、それをもらって食べる人たちはそのパンがどこから来たのかも知る由もなくただくれるからもらって食べていた。

しかし、不思議なのは弟子たちが手にパンをもって誰かにあげると、その人はパンを一つだけもらったはずなのに、自分でも知らないうちにその人の手には二つのパンがあるのだ。それで、パンをもらった人は自然と一つを隣の人に手渡した。するとそれを受け取った人はまた二つのパンを手にしているのだ。そのように手渡していくうちに多くの人たちが皆食べることができた。大人の男性はパンを一つ食べきれたけれども、子供や女性は食べきれなかったのでパンが残ってしまい、後から残りを集めてみると12個の籠にいっぱいになっていた。

私はこの異像を見た後、この光景を聖徒に話すと不思議に思われるだろうと考えた。

イエス様が五つのパンと二匹の魚で
五千人に分け与えられた際の祝福のお祈りの場面

苦難を受けられたイエス様(1970年6月)

異像の中で、イエス様がピラトの広場に立ち苦難を受けられる姿を見た。イエス様は茨の冠をつけていたが、それはカラタチに良く似ていた。その冠はくねくねした格好で出来ていて、頭を少しでも動かすとその重さのせいで下にずるずる落ちてきて、ある程度落ちてきた後には冠の棘が額に刺さって、もうそれ以上は下には落ちてこなかった。イエス様は貫頭衣のような赤い外套を召され、両手は体の前の方で縄で縛られ、その縄は後ろに続いていた。大勢の人々がイエス様の周囲で嘲弄していて、石が飛んでくる時もイエス様は手を縛られたままそこに立っていらっしゃった。

イエス様がピラトの広場を出て十字架のある所まで行かれる道でも多くの人々に指を指され嘲笑をお受けになられた。私は異像の中でその姿をみつめながら、悲しみと切なさに耐えられずイエス様の下に駆けつけてイエス様の服をつかんで涙を流した。イエス様は茨の冠を被られて両手が体の前の方で縛られたまま立っていらっしゃったが、私が跪いて、「こんなにも苦痛を受けられているのにそのままいらっしゃるのでしょうか。」と申し上げると、イエス様が縛られた両手を私の頭の上にそっと置かれて、「よく見なさい。私がこのように罪人たちから苦痛を受けたのだ。あなたは今見た通りに私を人々に証言しなくてはならない。」と仰った。その光景を経た後に異像から覚めて目を開くと、心があまりにも悲しくて長い間泣き崩れた。

著者に、「よく見なさい。私がこのように罪人たちから
苦痛を受けたのだ。あなたは今見た通りに私を人々に
証言しなくてはならない。」と話されるイエス様

亡くなられたイエス様(1970年6月)

イエス様は十字架に掛けられる前に、死を前にして数日間眠れずに苦悩なさる中、体がとても衰弱なさっていらっしゃった。イエス様が十字架を担いで行かれる時には気力がなくて数回転倒されると、ローマの兵士たちが周りにいた人を呼びつけて代わりに十字架を持って来させた。兵士たちがゴルゴタの丘に十字架を置き、イエス様を横にして手と足に釘を打ちつけた。

最も苦痛を被られた時が釘を打つ時だった。イエス様はそれまで沈黙を守られていらっしゃったが、その瞬間だけは我慢できずにうめき声を漏らされた。イエス様の母マリアはその声を聞きとても苦しくて耳を防いでいた。ローマの兵士が大きな釘を金槌で打ち付ける時には骨が砕け散り、衰弱なさったイエス様はその時うめき声を上げられた。

イエス様は十字架に掛けられてから6時間後にお亡くなりになった。異像の中で、イエス様が亡くなられた後、ローマの兵士がイエス様の死を確認するため、槍でイエス様の右の脇腹を刺した時には槍が背中まで貫通した。聖書を通して、亡くなられたイエス様の脇腹をローマの兵士が槍で突き刺したということを知ってはいたが、槍が背中まで貫通したということは知らなかった。

イエス様が十字架に掛かって亡くなられた後で、二人の男性と三人の女性がイエス様の御遺体を整えて差し上げた。御亡骸となられたイエス様の顔はとても御歳を召されてみえた。イエス様のお顔は血が全て抜けてしまい黄色くなっていて、骨と皮だけが残りげっそりしていらっしゃった。わずか数時間の差でしかないがピラドの広場に立たれていらっしゃったイエス様の姿はどこにも見て取ることはできなかった。

イエス様の御遺体を下ろす場面

小羊の婚宴式場 (1975年11月)

イエス様が異像の中で、小羊の婚宴式場の場面を見せて下さった。婚宴式場の屋根はドーム型になっており、中には十四万四千人が座る席があった。椅子はとても大きくてそれぞれの椅子の前にはテーブルがあった。そのテーブルの上には名札がおいてあった。

多くの白い御座がある中で、その場でイエス様が直接名前をお呼びになり、全ての預言者と聖人たちを順番に壇上で御紹介なさる時、それぞれ地上で聖徒たちの苦しんだ内容をお話し下さった。宴会場には大きな画面が一つあり、イエス様の説明と共にその聖徒が地上で苦しんだ場面が映った。聖徒たちは自分がイエス様から紹介されてお褒めを賜った瞬間、自分が地上で一生苦しんだことを思い出しながら、自分の苦労とイエス様の尊い血の恩恵のおかげで自分が栄光の座において永遠に喜楽と福楽を享受することに感極まって肩を震わせながら泣き出した。異像の中でイエス様と共に壇上に立ちその光景を見ながら私も感極まって涙を流した。その時イエス様が彼の涙をお拭きになりながら、「全ては終わった。あなたの幸せを永遠に享受なさい。」と仰り、その御言葉が終わると二人の天使が彼を彼の名札のある御座に案内した。

その光景をみて目を覚ますと、しばらくの間ぼーっとしていた。落ち着いて考えてみると、これから先繰り広げられる霊の世界とは実に雄壮なものだと思われた。

イエス様が十四万四千人の義人たちを一人ずつ御紹介なさる場面

創世以降に生まれて
死んでいった全ての
人々の霊が陰府から
出てきて裁かれる場面

裁き(1977年)

異像の中で、最後の審判の場面を見た。十四万四千人の天の兵士が悪魔と戦い、その戦いが終わり裁くことが許され(黙示録20：4)、裁きは十四万四千ヶ所で行われる。それぞれの審判官は大きなホールの中にある御座に座り審判をするのだが、審判官の左右には補佐する天使が座っていて、審判を受ける人々の一部は室内に入って細長い椅子に座り、残りは外で立って待っているのだが、その列は果てしなく見えた。審判官の前にある机の上には人々が地上にいる間、行った内容が記録された本がずらりと置いてあり、審判官はその本を見ながら審判を下した。

1977年当時の著者

また、審判官たちは地上で特に自分と近い関係にあった人や怨恨のある人が他の審判官に裁かれるように配置されていても、イエス様の玉座を受け継がれた者(黙示録3：21参考)に頼んで自分の方に送還することができた。それで、審判官は最後の裁きの時、彼らに恩赦を与えたり、恨みを晴らすことができた。私は、霊の世界の裁く制度が世の中の裁判制度と似ていることに神秘を感じた。

天国と地獄の光景(1975年)

多くの異像を見てきたが、中でもこの異像では特異な光景をみた。それは、天の国に天国と地獄が互いに隣同士につくられるという、それはそれは凄まじい光景であった。そこは私がいる場所から宇宙の反対側程ある距離に感じられる程とても遠いところにあり、宇宙はなくなり星も見えなかった。

天国の方には煌びやかで果てしない広大な大地のような所にドームのような形のとても大きな3つの建物があった。また、一方では暗闇の地で溶鉱炉から火柱が絡み合いながら立ち上り、そこから人々のわめき立てる声が聞こえた。その声は悲惨でとても聞いていられないものだった。そこがまさしく地獄であった。地獄では途轍もない熱さから人々が這い出して来るのだが、またその奈落に落ちていくことが繰り返されていた。

天国と地獄が途轍もなく広大であるにも関わらず、同時に見ることができるのは遠く離れて見たからだ。不思議なのは、霊の世界なのにも関わらず空が青かったことだ。

私は地獄と天国が同時に天の国に作られるということにとても驚いた。実は、裁きにより誰かは天国に行き、また他の誰かは地獄に行くので、天国と地獄は同時に作られるのは当然のことではあるが、実際にこの光景を御見せ下さる前にはそう実感できずにいたのだった。

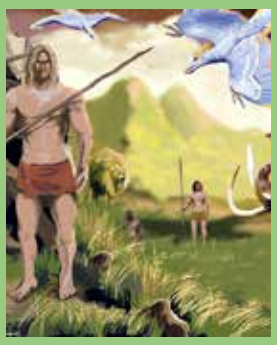
目が覚めてからも10分程の間、先ほど見た光景が錯綜してぼーっとしていたが、人間が生きるとはどういうことなのかと一しきり考えた。もし、私も神ヤハウェ様の摂理をしらずに生きた後に死んだとしたら、恐ろしい火炎のどん底に行くところだったという恐ろしい考えが思い浮かび、神ヤハウェ様に感謝を申し上げた。

今後、主ヤハウェ様が直接御造りになられる天国と地獄の光景

オリーブの木に関連する異像

初めて見た異像

原始生活



汝矣島復興会の後

先の僕の霊的地位

天使と果物

栗の収穫

葡萄の収穫

嘆くオリーブの木

祝福の御言葉

初めて見た異像(1958年4月20日)

私の家族は私が数えて9歳の頃、6・25戦争中に江原(カンウォン)道鉄原(チョルウォン)から慶尚(キョンサン)北道金泉(キムチョン)の方に避難した。私はキムチョンで育ち、父が体の麻痺で寝込むようになり、家は父の病気を治そうと有り金を使い果たした。私が中学の時、2学年上の先輩のオム・ゲウンさんより伝道館に行けば父の病気が治るという話を聞いて我が家族は1958年4月17日に、当時パク・ビョンクォン伝道師のいるキムチョン伝道館に行った。

私は伝道館に行ってから3日後に不思議な夢を見た。夢の中で私は鞄を持って学校に行っていたのだが、急に辺りが暗くなった。空には雲が集まりＳＦ映画に出てくるように雲の中から眩い光が差してきたのだが、道を歩いていた学生たちがその光に当たると体をくねらせてギャッギャッと叫びながら田んぼの畔と道端に倒れていった。

私はその様子を見て怖かった。そんな中、突然雲の中から眩い光が私の前に差し込み、その光の中にアメリカ人のような人が白い服を着て降りてきた。

後にその御方がイエス様だということを知ることとなったが、私は当時イエス様だと分からなかったので外国人は皆アメリカ人であるとだけ考えた。その隣に白い服の人がもう二人いた。私が怖くて震えているとアメリカ人のような人が、「大丈夫。あなたは大丈夫だ。他の人々は皆倒れてもあなたは大丈夫だ。」と仰った。

目が覚めて父に夢の話をすると、父が、「お前は将来偉い人になりそうだ。」と言ってくれた。

光をお発しになりながら
空から降りて来られるイエス様

原始生活(1972年4月)

アダムがエデンの園から追放されてからどんな生活を送ったのかが気になり、主ヤハウェ様にお伺い申し上げた。主ヤハウェ様が異像の中で、その子孫たちの生活を御見せ下さった。科学者が原始人の生活に関して言う通り、彼らは原始的な生活をしていた。彼らは身長が190ｃｍを超える長身で、肌はインディアンのようで、髪の毛は長くて、体格はまるでボディービルダーのように良く、顔立ちは皆ハンサムだった。

彼らは洞窟のなかで生活をして、木を切って洞窟の入り口を適当に塞いで獣や動物から身を守っていた。彼らは草原で20～30人単位で一緒に移動しながら、自分たちの言葉で何かを話していたが、それはまるで動物の声のように聞こえて何を言っているのかさっぱり分からなかった。

一方ではマンモスがうろうろしていて、空には翼が大きくてクチバシの長い鳥が飛びかっていたが、広げた翼の両端までは8メートル以上はありそうだった。人々はスカートのように獣の皮で下半身に巻いて、手足には肌を覆い隠すほど毛がぼうぼう生えていた。獣を採る時は長い棒で作った槍のようなものを使ったり、棒で叩いて捕まえたりもしていた。ものを食べるときは焼くこともあったが、そのまま生でたべたりしていた。

私はあれが原始人の生活なのかと緊張しながら彼らの動く光景を見ていた。目が覚めた時は全身に冷や汗をかいていた。異像から醒めて暫くしてからようやく現実に戻り、聖霊が露雨のようにざあっと降り注いだ。

エデンの園より追い出されたアダムとエバの子孫が原始時代を生きていく姿

汝矣島復興会の後(1973年5月30日)

1973年当時の著者

1973年5月30日、ソウルのヨイド広場で世界的な復興講師のビリー・グラハムが復興集会をする時、全国から集まってきたキリスト教信者が自分の教会のプラカードを持ち、地面に新聞紙や敷物を敷いて座り込んで一生懸命に祈ったり讃美歌を歌っていたが、私もそこに座った。私は当時、主ヤハウェ様より二番目のオリーブの木としての使命を賜り、時がくるまでは口を閉ざしておくように御指示を賜っていたので、全国的な復興会があると聞いて興味を持ちヨイド広場に行ってみたのだ。

多くの聖徒たちが一生懸命礼拝している光景をしっかりと見てから、私は雙門(サンムン)洞の自分の家に帰ってきて、夕方頃に集落にある小山に登って主に祈りを捧げた。昼間ヨイド広場に集まっていた人々に関して主はどのように御考えになられているのか気になり、「彼らはどうなるのですか。」と質問を申し上げてから帰宅すると眠りについた。

夜中の1時ぐらいに異像の中で、天使が来て、「ヤハウェ様がお呼びでいらっしゃいます。」と言った。天使について道を行くと、空に穴がぽっかりと開いたようになり空から光が大地を照らしながら、七色の虹色に光輝く絹のようなものが地面までそっと降りてきた。まるで結婚式で新郎と新婦が入場する時につかうロール布のようなものが降りてきて私が立っている目の前まで来た。「その上に乗るのだ。」という御声が空から聞こえて、その布の上に乗って空を見上げると、空の開かれた所に神の玉座がみえた。そこから光が輝いていてヤハウェ様が仰せになられた。

「先ほどあなたがした質問はこのヤハウェが聞きおいた。よく聞くのだ。いくら大勢の人が集まったとしても私の摂理でなければこのヤハウェとは何の関係もない。誰であろうと、私の摂理の中に入って来て初めて私が望んでいる事をすることとなり、私の国に入ることとなるのだ。」私は目が覚めてから、神ヤハウェ様のお言葉について一つ一つ考えてみたが、納得するには手に余る感があった。

ヤハウェ様が空の玉座より
直接御声を通して
御言葉を下さる場面

先の僕(しもべ)の霊的地位(1974年4月14日)

異像の中で見ると、50人ほどの預言者たちが座っている中、イエス様が彼らを一人ずつ呼び寄せられて至聖所にお送りになられた。預言者と殉教者だけで構成された十四万四千人は主ヤハウェ様がお決め下さった兵士の人数である(黙示録14：1、19：14)。彼らは亜麻布の服を着ていたのだが、亜麻布を来た預言者たちはSF映画に出てくる宇宙人やアンドロイドのようにみえた。

イエス様が預言者を一人一人お呼びになる時、先の僕(一番目のオリーブの木)が意気揚々として座っていた。しかし、最後まで彼の名前は呼ばれずにいると、先の僕の顔色が暗くなった。

全員の名を呼び終わられたイエス様に私が跪いて申し上げた。「イエス様、長老様(先の僕)は地上にいる時、監獄にも二回も行かれて、一生懸命に頑張ってきた方です。名簿から漏れさせてはなりません。どうか御酌量くださいませ。」

イエス様はバスタオルでできた長いガウンのような服を着ていらっしゃった。下の方の両側にポケットがあり、腰は紐で結んでいらっしゃった。イエス様は私の話を聞かれてから目をつぶってお考えになると、右のポケットから白い封筒を取り出されて私に下さった。

両手で頂いてから見てみると、封筒には先の僕の名前が漢字で縦に書かれてあって、その下にもまた漢字で「下位」と書かれてあった。封筒を見てから長老様を見ようとして振り返ったところ、その場に長老様の姿はなかった。

目を覚まして心に寂しさを感じていると聖霊が降臨した。

イエス様が預言者たちの名を
お呼びになり至聖所に入ることを
命じられる場面

天使と果物(1980年3月中旬)

1980年当時の著者

周囲の讒言で監獄に入り苦痛を受けていた頃だった。もうそろそろ春が近づき外は暖かく花が咲く頃、独房で過ごすのがとても息苦しかったところ、ある日、異像の中で天使がやってきた。「ついてきてください。」「どこに行こうと言うんです？」「お越しになれば分かります。」それでその天使についていった。

天使の姿は女性でもなく男性でもなく、普通に見えたが、私より身長が7～8cmほど高かった。その声も男性と女性の声が混ざっているように感じられて、顔は美男と美女が混合されたようで欧米人のような顔立ちだった。

気温が22度ぐらいで暖かい日だった。私は天使について休むことなく道を歩き続けた。ずっと歩いていたせいか足が痛くなって天使に話した。「おーい、足が痛いんだが、一体どこへ向かってるんだい？」「間もなく着きます。」しばらく行くと公園のような所が出てきて、木々が生い茂っていた。

随分歩いたせいか暑くて足も痛むので、ここで座って休むと言うと、天使はそこに座っていてくださいと言って、どこからか大きな籠を持って帰ってきた。その中にはマクワ瓜のようなカリンのような果物があり、りんごのような果物もあった。「こちらをお召し上がりください。」

そうでなくても喉も渇いていたので、その果物をとても美味しく食べた。その果物は今採ってきたばかりにもかかわらず、冷蔵庫から出したばかりのようによく冷えていた。果物を食べながら先ほどの天使を探そうと辺りを見回すとどこにいってしまったのかいなくなっていた。

果物を思う存分食べてから目が覚めたが、しばらくしてから意識がはっきりして辺りをみたら、監獄の中だった。不思議なことに、異像の中で歩いたのにもかかわらず本当に歩いたように足が痛かった。私が外の世界に出られずに監獄の中にだけいたので、主ヤハウェ様が外に出て思う存分歩き廻る体験をさせて下さり、御慰めくださった異像であった。瞬間、頭の上に露雨のような聖霊が降り注いだ。

著者と共に道を歩いていた天使が
果物を持ってきた場面

栗の収穫(1978年夏)

1978年当時の著者

異像の中で、主ヤハウェ様が栗を収穫する場面をお見せ下さった。風が吹くと熟した栗が落ちた。それで、私がそれを拾って籠にいれると主ヤハウェ様の御声が聞こえた。

「あなたは何をしているのか?」

「はい、私は今栗を拾って籠に集めています。」すると主ヤハウェ様が仰せになられた。「よく見るのだ。熟した栗は風が吹いた時に落ちてあなたが拾って籠に入れることができるが、熟していない栗は落ちないのであなたがいくら収穫したくても収穫できないだろう?あなたについて来ている羊の群れ(信徒たち)もこのように熟していなければ、あなたが収穫して私ヤハウェに持ってくることは出来ないのだ。

主ヤハウェ様は自分に従う者が熟して初めて収穫できるということを強調なさった。異像を見てから、じっくりと考えてみると、私がすべき仕事が実に難しい使命であると心配になった。

ヤハウェ様が著者に、従う者たちが
栗のように熟されなければ収穫ができないことをお教え
になられている場面

ヤハウェ様が著者に、従う者たちが
葡萄のように熟されなければ収穫できないことを
お教えになられている場面

葡萄の収穫(1982年)

1982年当時の著者

1978年の栗を拾う異像に続き、1982年に今度は葡萄を採る異像を見た。熟した葡萄は房にそっと手を触れるだけで軸が枝から離れて籠に入れられたが、熟していないものはいくら軸の部分をぐるぐる回しても葡萄が痛むだけで採れなかった。その時、主ヤハウェ様が仰った。

「あなたは何をしているのか?」

「はい、私は今葡萄を収穫しています。」

「よく見よ。熟れたものは力をいれずとも簡単に採れるが、熟れていないものは枝から離れないだろう?それと同じことだ。あなたに従っている羊たちの群れも熟せばあなたが収穫することができるが、熟さなければ、あなたがどれほど収穫したくても私ヤハウェの下に納めることは出来ないのだ。」と仰り、羊たちの群れが豊穣な穀物として熟さなければいけないことを再度強調なされた。

私は、二度も真実の聖徒をお望みであることをお見せくださった神の御旨をしっかりと承るべきであるという考えに心が重かった。

著者が天の摂理を伝えても
誰も信じてくれなかったために
嘆いている場面

嘆くオリーブの木(1983年)

1983年当時の著者

本日祝宴の膳を準備したにもかかわらず来る者がいない。主の僕が主ヤハウェ様よりご指示頂いた通りにアルゴク聖殿をつくり、生きている間に先祖代々引き継いできた罪を全てイエス様の尊い血が込められた生ける水で洗い流して、死んだ後にはその霊が救いを受けられるようにしてあげるのにも関わらず人々は来ない。

1983年の異像の中でも、人々が主ヤハウェ様の御業を認めてくれなかったので私は嘆いた。私が既成の教会の長老たちに、「オリーブの木の御業は人間の業ではなく神の御業です。」と一生懸命伝えると、彼らは、「お前はパク長老(一番目のオリーブの木)と同じ輩だ。」と相手にしてくれなかった。信じない人々に、「ここが主の御業です。来られよ。」と言うと、「えせ宗教だろ。」と無視された。伝道館の人たちに、「二代目のオリーブの木というのは明らかなので来てください。主のために私たちが一緒に行かなければいけません。」と涙を流しながら話すとかぶれ者が話にもならないことを言っていると誹られた。どこにも訴えるところがなく、一人で地面を叩きながら号泣しつつ、「ヤハウェ様、一体私はどこでどのように話をすれば今日の主の摂理を人々が認めてついて来るようにすることが出来るのでしょうか。オリーブの木の御業を到底行うことができません。」と申し上げた時、空からの光が私を照らして御言葉が天から降臨した。

「あなたがオリーブの御業を行うためにこのような困難を経験するのだ。あなたがオリーブの木を主張せずに能力を発揮したのなら君に従う人々は今の何十倍も多くなっただろう。しかし、困難でもオリーブの木の御業は私ヤハウェの摂理なので、あなたが最後まで守って固守しなければならん。」

その御言葉を聞いてから目を覚ますと心が酷く悲しくなった。

祝福の御言葉(1990年5月)

1990年当時の著者

久しぶりに主ヤハウェ様が異像をお見せ下さった。アルゴク聖殿の前方の、カラマツが生い茂った小道の方に霧が深く立ち込めていて、空の門が開きながら虹色の光が現れると屈折しながら降りてきてアルゴク聖殿の前庭を照らして、空の開いた窓からヤハウェ様の玉座が現れた。そして、主ヤハウェ様が仰った。

「そこに上がるのだ。」

光が照らしている所に立ち、空を見あげながら主ヤハウェ様の玉座を遠くに拝見させて頂いたのだが、その玉座は天の国で拝謁した時のものと同じものだった。

ヤハウェ様が仰った。

「あなたに従う人々がこの聖殿を経て私ヤハウェの国に入って来ることになるのだ。」

私がエデン聖会を始める前の1972年10月、先の御業が滅びていくのをご覧になったヤハウェ様がお怒りになり、先の御業に対して、「この国民はモーゼの時代より更に傲慢な者たちだ。」と責められたが、18年ぶりにヤハウェ様が怒りを解かれ、祝福の御言葉を下賜なさったのだ。

アルゴク聖殿はその御言葉の通り天の兵士となるアルゴク(豊穣な穀物)をつくり、主ヤハウェ様に差し上げる場所である(黙示録14:15-16参考)。それでアルゴク聖殿を経なければ主ヤハウェ様のところには行くことが出来ないと仰せになられたのだ。霧の中を通って降りて来る絹糸のような燦爛とした光が眩いほどに美しい光景だった。

それから私は早朝未明に散歩に出かけてアルゴク聖殿の前にあるその場所で感慨に浸り、異像の中で祝福の御言葉を仰せになられたことに対して主ヤハウェ様に感謝のお祈りを捧げた。

ヤハウェ様が著者に、「あなたに
従う者たちがこの聖殿を経て
私ヤハウェの国に入ってくるだろう。」
と仰せになる場面

その他の異像

私がヤハウェ様の御声を初めて聞いたのは1958年、16歳の頃だった。しかし、それがヤハウェ様の御声でいらっしゃったということは4年後である1962年に知ることとなった。イエス様を直に拝謁してその御声を聞いたのは1970年、28歳の時だった。ヤハウェ様の御声はイエス様の御声に比べて少し太くて雄壮な雰囲気があって、イエス様の御声はヤハウェ様の御声に比べて若干細くて柔らかな感じであった。

ヤハウェ様の御言葉

1958年10月29日、初めて聞いたヤハウェ様の御声

私は1958年16歳の時、慶北の金泉(キョンブク・キムチョン)で伝道館に通い始めた。その年の10月ソウル東大門区典農(ジョンノン)洞に引っ越した。ソウルに引っ越してから数日後、父が他界した(1958年10月28日)。その翌日、親戚のおばさんの家に父の訃報を知らせに行く道すがら、「もう父のいない息子となってしまったのか。」と思った時、「お前はどこで父を探しているのだ？お前の父は天におる。」という声が空から聞こえた。空を見上げると小さな雲しかなかった。これが主ヤハウェ様の御声だということは1962年にヤハウェ様がもう一度御言葉を仰せになられた時に知った。

1962年4月中旬、父と呼ぶのだ

私は1960年6月からソウル龍頭(ヨンドゥ)洞にあるテイル木材に勤めていたが、1962年の都市開発計画により会社がなくなり職を失った。再び仕事を探していた頃、夢で先の僕から伝道師になりなさいという言葉を聞いて、今の京畿(キョンキ)道富川(プチョン)市素砂(ソサ)区範朴(ボムバック)洞にある伝道館の信仰村(シナンチョン)で

伝道師養成課程に入り聖書の勉強を始めた。
ある日、夜明けの礼拝の後、聖書の勉強をして家に帰ってから昼間にうつらうつらと少しの間寝入ってしまった。すると主ヤハウェ様が仰せになられた。「これからは私を探し求める時にヤハウェ様とは呼ばずに、父と呼ぶのだ。然らば私が、『ここにいる。』と答えよう。」その音声は16歳の頃に聞いた御声と同じだった。
私は主の僕となってから、主ヤハウェ様が勝利者に命の水の泉を受け継がせるために下賜なさったので、かわいている者に價なしに飲ませるようにして下さり、また、ヤハウェ様は勝利者の神となられ、勝利者を主の子として相対してくださるという約束があるということを知った(黙示録21:6-7)。

1970年8月、聖書の空欄

主ヤハウェ様が異像の中で、聖書を開くように仰せになられたが、その聖書は普通の聖書の3～4倍も大きく見えた。主ヤハウェ様が、「創世記を開きなさい。」と仰せになり、私は聖書を開いた。「それを見よ。」と仰せになられて見てみると、文字は韓国語になっていて、あちこちが空欄になっていた。主ヤハウェ様は、「その空欄を見よ。その空欄は隠された話なのだ。」と仰せになられて、空欄に目を凝らすと、まるで映画のように場面が現れた。その内容は主ヤハウェ様が今まで悪魔に知られないためにお隠しになられておかれたものだった。その後にも、たまに聖書にある主ヤハウェ様の御業の中で、私が気にはなっても知る由もなかったことを画面を通して御見せ頂いたので多くのことを悟ることができた。

1972年10月、モーゼの時代より頭を垂れることを知らない。

主ヤハウェ様が天の門をお開きになられ先の僕が導いていた御業について仰せになられた。「私がこの民族を掃き捨てよう。この民族はモーゼの時代に広野で私を恨んでいた者たちよりももっと頭を垂れることを知らない者たちだ。」天で主ヤハウェ様のお怒りの御声が聞こえて来ると大地が大きく揺れた。私は自分の顔が真っ青になるのを感じつつ、少しの間呼吸を整えてヤハウェ様に申し上げた。「主ヤハウェ様、

モーゼの時代にも御怒りを感じられて人々を滅亡させようとされた時、モーゼの願いをお受けになられ御寛容を施されたではありませんか。今日私はヤハウェ様がお怒りになられた理由はよく存じ上げておりませんが、しかしヤハウェ様が二本のオリーブの木をお決めになられた時には御旨があられたと存じ上げておりますが、何卒お怒りをお納め下さり、もう一度私にも御機会をお与えたもうことはできませぬでしょうか。」しかし、ヤハウェ様はお答えなさらず、その光は徐々に薄くなり天の門は閉ざされた。

1973年3月18日、復職の指示

主ヤハウェ様が異像の中で、アカシアの花が咲く頃に伝道師として復職して仕事に就く準備を整えよと仰せになられた。私はその御言葉を聞いて先の僕と私の間の関係が、モーゼとヨシュアのような円満な引継がなされる間柄ではなく、サウルとダビデのような敵対関係になることを直感して悩んだ。私はさすがにお答え申し上げられなかった。

1973年3月20日、復職指示の催促

主の僕の準備を整えよという御言葉を主ヤハウェ様より拝聴してから二日後に主ヤハウェ様がもう一度仰せになった。「急を要す。」と仰せになられた。私はこれまでの生活で世間で色々な仕事に手をつけていて、それらを一通り整理するのに6か月の猶予をくださいと申し上げた。

1973年6月、核兵器

異像の中で、主ヤハウェ様より核兵器について御言葉を頂いた。その内容は、人間たちが核兵器を作っておいて、それを自慢気に思っているが、時間が経てば逆に核兵器が対処困難な状況にいたり、このような兵器を作ったことを後悔する日が来るということであった。

1973年10月2日、別途に行う

9月16日、伝道館に復職して第二のオリーブの木という噂が広まり先の僕により解雇された。その後、早朝未明の異像の中で、主ヤハウェ様よりこれから自分がしなければいけないことについて指示が下された。天から四つの内容を区分して御見せになられた。

第一に、伝道館の檀上には主ヤハウェ様が御覧になって卑劣な性質の人間たちが傲慢な姿勢で上座を占めていて、見るに堪えられないほどであった。第二に、聖徒たちが祭壇で礼拝を捧げているにも関わらずシェパード犬が入ってきても追い払うことなく、シェパードと共に聖殿の中で闊歩しながら祭壇の内部を穢した。第三に、露と芳しき香り(主イエス様の尊い血で成就された生ける水、イザヤ書26:19参考)の代わりに蛍光灯の光を見て集まる虫と小さい蝶が無数に集まっていた。第四に、私が弘濟(ホンジェ)洞の伝道館で説いた説教により人々の間で私が二番目のオリーブの木という噂が広まったことについて、先の僕は、事前に阻止せずに自分に報告が上がってくるように放置していたと激怒した。彼は霊的な偉大さが消え去り完全な肉に戻った姿だった。

続いてヤハウェ様は、伝道館の人々が私のもとに集まり礼拝に参与する姿を御見せ下さり、東大門の東側に場所を探して新たな御業を始めよと仰せになられた。

1973年11月、修補する者

エデン聖会を始める前、ヤハウェ様が、「滅びた御業をあなたがもう一度立て直せば、あなたのことを滅びたものを修補する者と名づけよう。そうなると、先の僕の功績まであなたに賞として与えよう。」と仰せになられた。

1973年11月、聖徒たちの無関心

1973年11月17日、エデン聖会を始めた後、ある日、壇上でヤハウェ様の摂理を一生懸命伝えて帰えてきた。その夜、ヤハウェ様が僅か数名しかいない人々が集まって礼拝を捧げる場面を御見せになりながら仰せになられた。「あなたに従う人々はあな

たが説教する時、無関心で聞いていないのを見てみよ。」異像の中で見てみると人々が顔を背けて他の所を見ていた。そのくらい信者たちは私を信じていない状態だということをヤハウェ様が教えてくださったのだ。

1973年12月、生ける水が10倍強い

ヤハウェ様が異像の中で仰せになられた。「あなたの時代は先の僕の時代より生ける水の効果が10倍強く現れるようになるだろう。」

1974年3月15日、ゼカリヤの預言

異像の中で主ヤハウェ様が、「あなたの時代から2,500年前、私が若き僕ゼカリヤに言った言葉があなたの時代に成し遂げられる。」と仰せになられた。私はゼカリヤが自分のように若い頃、主の僕になったことをその時初めて知った。

1974年4月、あなたが立つ壇が神聖である。

異像の中で、ヤハウェ様が当時の国内外の大きな教会を御見せになられた。続いて、私が立っている清涼里(チョンリャンリ)祭壇の屋根に穴が開いて、その穴に天から光が降り注ぐ中、ヤハウェ様が仰せになられた。「あなたが立つ壇が神聖である。それは私の摂理があなたと共にあるからである。」

1974年、作られてこそ入って来られる。

ヤハウェ様が、「君に従う羊たちが完全に作られなければ、誰も入って来れず、あなたも納めようとは考えてはならぬ。」と仰せになられた。

1974年、脳に記録

ヤハウェ様が異像の中で、私の脳を調整したと仰せになり、私の脳を御見せになられたのだが、私の脳の中にラジオの付属品のような小さなものがあった。ヤハウェ様が

その中に7万8千種類が記録されていると仰せになり、次の御言葉を下さった。「私があなたの脳を調整したゆえ、他の人間の脳とは異なり、一度覚えると、特に天の国の全てのことは昨日の出来事のように一生忘れずにあなたの頭の中に刻み込まれているだろう。」

1974年、水の豊富な園

ヤハウェ様が、「あなたに従う羊たちがあなたの心と同じように感動すれば、あなたがしている業は水の豊富な園のようになる(繁栄する)だろう。」と仰せになられた。

1975年7月、千年世界

黙示録について解説を交えた説教をしていて千年世界について説明をした。「千年も待つというのはどれだけ退屈だろうか?」と考えた。その夜ヤハウェ様が、「千年が地上では長くとも霊の世界では一瞬に過ぎない。」と御教授くださった。

1975年、報いて下さる

ヤハウェ様が、「先の僕の御業で苦しんだ人々があなたの下に来て従うと、先の御業で行ったことまで報いよう。」と御約束なさった。

1975年、孤独

ヤハウェ様が主の御業が今後発展していく光景を御見せになりながら仰せになられた。「あなたが歳をとり、多くの聖徒たちが従うようになると、きっとあなたは独りで孤独を感じる立場になるであろう。」
私は異像の中でも、人が多くなるのになぜ孤独を感じると仰せになるのか、という思いがした。しかし、時間がたつにつれて従う人が多くなると、ヤハウェ様の御業について誰とも相談することができない位置でヤハウェ様の最後の御業の責任を負わなければいけない指導者としての孤独さを切実に感じることとなった。

1977年10月18日、母の愛

異像の中で、牧師の純粋な愛についてヤハウェ様から教えを授かった。迷子の子供が自分のお母さんを探し回りながら泣いていた。自分の母は遠くにいるのに、子供は周りにいる自分のお母さんと似ている女性が自分の母だと思ってついていくと、違っていたことに気づき、また泣き出しながらお母さんを探す。結局、その子は実の母に会って母の胸に抱かれた。

私は、実の母の暖かい愛情のこもった眼差しと赤の他人の無関心な態度を目を見張って見ていたところ、ヤハウェ様の御声が聞こえた。「献身と奉仕の如く貴いものはない。」これは聖徒に接する時、いなくなった子どもを探す母の心情で献身して奉仕しなければいけないということを気づかせてくださった御言葉だった。そして、奉仕を行う時は他人が手伝ってくれないということを恨んではいけないということを気づかせて下さった。またヤハウェ様の聖殿の小さな分野であっても、無関心であることは結果的にヤハウェ様に御怒りを差し上げることとなるということが分かった。

引き続き異像を見ると、ソウル教会に来て祈りを上げる人がいた。彼女が祈りを終え、床と窓をきれいにふいているのを見ているとヤハウェ様が仰った。「あれを見よ。私の聖殿で埃一つを拭取ることまでも全て記憶して必ず賞で報いよう。」

1977年、追悼礼拝

ヤハウェ様が追悼礼拝の貴重性についてお教え下さった。私を通して真理を悟った聖徒たちが、ヤハウェ様を信じずに死んだ人のための追悼礼拝を捧げると、その祭祀が天に届き、その人が後に裁かれる時に効力が発揮されることになるということをお教え下さった。

1980年4月、アルゴク聖殿の異像

周りの讒言で監獄にいる時のことだった。ある日、ヤハウェ様が、「ソウルから1時間余りかかる閑静な所に私の聖殿を建てて私に栄光を捧げよ。」と御指示なさった。新しい聖殿は壇上の前に幕があり礼拝があるときだけ壇を開放し、普段は見えない

ようにしてあって、聖歌隊の席がVの形になっていて聖歌隊員たちが両側に座れるように配置されてあった。

1982年10月、地方祭壇の建築

仁川(インチョン)祭壇を建築している時だったが、ヤハウェ様が異像の中で、地方の祭壇を仁川祭壇の形式で急いで建てよと仰せになり、これから建築をする時は私に従う羊たちの手でせよと御指示なさった。

1983年9月、ソウル別館の建築

ソウルの教会で別館を建てようとする時、信者たちの負担となることを心配して献金について話せずにいたところ、ヤハウェ様が心配することはないという御言葉を下さった。「あなたに従う羊たちの80%があなたの教えを理解し、あなたの指示に従う。あなたが建築を推進しても信仰が揺らぐことはないゆえ心配せずに進行せよ。」

1987年12月、尊貴をもたらそう

アルゴク聖殿の建築が終わり、ヤハウェ様が、「困難な状況の中、私の聖殿を建てようと苦労が多かった。これからあなたに多くの人々の前で尊貴をもたらそう。」と仰せになられた。私は、「私は今でも満足しています。私に従う羊たちが先の僕の御業でも労苦が多かったうえ、この御業に来てからも嘲りを受けながら苦労も多くしております。彼らが苦労した分を残さず賞で報い給って下さりませ。」と申し上げた。

イエス様の御言葉

1971年4月、罪を洗い清めて下さる。

私が石串(ソックァン)洞で貧しく暮らしていた頃の異像である。主が異像の中で御言葉を下さった。「あなたにあるあなたの先祖より代々受け継いだ全ての罪を私が私の血で洗い清らかにしておいた。これからはあなたを通して私の血が伝わり他の人々も清らかとなろう。この時代であなたを通さずに私の摂理を知る者はいない。」その御言葉が終ると同時に天の門が開き、上から明るい光が射して天使たちの恍惚とさせる合唱が響き渡ったが、それは、「この身を虜にせし、この世の楽しみ去り、心の重荷たりし、罪咎きよめられし今」という聖歌５１８番(新聖歌４２４番)　だった(合同賛美歌200番)　。これはイエス様が私の罪を洗い清めてくださったことに対する讃美だったが、天使たちの姿は見えず合唱の音だけが響いていた。

1972年2月27日、9万人

イエス様が先の僕に従う聖徒たちに惜しむことなく恩恵を与えられたのが9万人だったが、彼らは急激に堕落し、その数が減ると仰って、「その中で一人でもいいから私の国に入れる資格のある者をつくりなさい。」と仰られた。

1972年3月5日、ヘゲモニー

3月1日の夕方、妹のヨンジャが家に訪ねてきて私にとても驚くべき衝撃的な話を聞かせてくれた。それは2月26日に先の僕の奥さんが亡くなったということだった。私はなぜ先の僕にこのような悲しみをお与えになるのかお教え下さいとイエス様に申し上げた。

4日後の3月5日に御返答なさった。異像の中で見ると、先の僕の奥さんが前に立ち、館長たちにあちこち発令を出し、先の僕は向こう側で気に入らない顔をして見ている

だけだった。イエス様は彼女が「ヘゲモニー」を握って自由自在に操っていると仰り、彼女が主導権を行使しながらイエス様に不栄光を帰したと仰せになられた。イエス様が先の僕に天の御業を妨害する彼女の悪を許すことはできないと仰ったが、先の僕が三度も許しを請う祈りをしたので手を下さなかったと仰った。しかし、彼女が最後まで誤りを悔い改めることは無かったので、結局主イエス様が命を持ち去られたと御説明下さった。

1972年5月、40億の人口の中で

石串(ソックァンドン)洞で貧しい生活をしている時、イエス様が異像の中で仰せになられることには、「私があなたを40億人の世界の民の中から選んだのだ。この時代に天の摂理があなたと共にあるだろう。」と仰せになられた。
それから目を覚ましてから喉が渇き水を飲もうと探していて、ふと鏡を見ると自分が本当に40億の世界の人々の中から主イエス様に選ばれたのかと感慨深かった。

1972年10月、私の血を踏みにじる

イエス様が敗れ廃れていく先の僕の御業について仰せになりながら御言葉に詰まり、悲しみの中で涙をこぼされ、涙声が混じられた御声で私に仰った。「私は勝利者が現れるのを二千年間待っていたがその存在が現れて破格的に聖霊を水を注ぐように注いで与えたのだ。それをあなたは自分の目で見たのではなかったのか。」それで私が、「はい、見ました。」と答えると、イエス様が、「それは前者(一番目のオリーブの木)のものなのか、私の血なのか。」と仰った。私が、「主イエス様の血です。」と申し上げると、「前者に従う人々が私の血を踏みにじって、私を背信するに至ったのだ。」と仰った。私は理解できなかった。イエス様が、「あなたはこれをどう思うのか。」と御質問なされた時、私は何も答えられなかった。続いてイエス様は、「私の血を冒涜し足蹴にした者たちは裁きの際、必ず私が呼び出してこの手で地獄に投げ入れる。」と激怒なさった。

1972年10月、君の民族は特異だ

イエス様が先の僕の御業について、「二千年間、多くの民族に接してみて導いてきたけれど、その中でもあなたたちの民族はとても特異である。」と仰った。良い意味で仰った御言葉ではないように感じられた。

1973年3月8日、一人でやらなければいけない。

二本のオリーブの木はイエス様の指示に従い、霊の世界で一緒に力を合わせて竜に権勢を受けた獣と霊の戦争を行わなければいけないが(黙示録11:7)、不幸にも先の僕の御業が敗れ廃れてしまった。イエス様が二本のオリーブの木がすべき事を一人でしなければいけないと御言葉を下さり、本当に私は心に深い悲しみを禁じ得なかった。

1973年5月5日、あなたが勝った

雙門(サンムン)洞にいる時、主イエス様が異像の中で仰せになった。「今まであなたを様々な状況において見守ってきた。そしてあなたがどのような状況でも私に仕える姿勢が変わらないということが分かった。あなたが勝った。過ぎ去った日々を考えてみると私があなたを特別に接してきたことを分かるだろう。見よ、これからのあなたの将来はこのようになるだろう。」と仰りアスファルトで出来た道を見せて下さった。

1973年6月26日、能力を移して下さる

異像の中で、イエス様が先の僕と私をお呼びになられた。イエス様の前に二人は跪いていると、イエス様が先の僕に、「あなたの使命はもう終わった。あなたは私との契約を破った。ゆえにあなたが持つ能力とあなたがしていた全ての業はイ・ヨンスに引き渡される。」と仰ると、先の僕の顔にあった光が少しずつ消えながら私に移ってきた。栄光が一つ一つ移され、能力が一つ一つ移される度に、先の僕の姿も少しずつ変わっていった。

続いて「新しい賛美歌」(1962年に出版)を使わずに、「合同讃美歌」(1949年に出版)を使用せよと仰せになられた。新しい讃美歌は人間の考えで歌詞が作られているので、イエス様は適切だと思わないと仰った。合同讃美歌の歌詞は証拠の恵みを賜った人々により書かれたので適切だと仰った。合同讃美歌の中でも191章(「十字架を負う」、作詞キム・インシック、1905)がイエス様のことを最もよく描写しているとイエス様は褒めていらっしゃった。

1973年7月、先の僕と共に油を注がれる

崩れ落ちてしまったオリーブの木の御業をもう一度立て直すという難しい使命をイエス様より御指示頂き、時間の流れの中で一つ一つ整理して行くようにというご依頼を賜った時に、私は長い時間を置いて、よくよく考えてみてもとても自信がなかった。それで、イエス様に申し上げた。

「私が世に出てイエス様の御言葉を伝えるとしても、誰もそれを信じてくれる人はいません。平凡で静かに生きてきた人であっても難しいことを、芸能界にいた私としては手に余る仕事です。」と申し上げた。

するとイエス様は、「あなたが尊敬して従っていた先の僕を、私が直接油を注いでオリーブの木として立てた時に、聖書に記録された通りに私は二本を立てた。あなたが幼かった頃は私を知らなかったが、私はあの時、既に二人の証人とするため、あなたにも彼と同じく油を注いでおいた。あなたが過ぎ去った日々の軌跡をよく考えてみればあなたが私のことを知らなかった頃にも、私があなたと共にいたということが分かるはずだ。かつての生活を振り返ってみなさい。」

そして、「あなたが世に出なければ、このようになるのだ。見よ。」と仰って御見せ下さった時、光が消えて聖徒たちが進むべき道を探すことができずに当ても無く彷徨い続ける場面が現れたが、聖徒たちが所々に集まり礼拝を捧げながらどうして良いか分からなくなり打ちひしがれる場面を御見せ下さった。

続いて、「あなたがすることではないゆえ、あなたは私が指示する通りに従うのだ。」と仰った。

1973年7月、パウロの死体

イエス様が神の僕たちに対する御説明を下さる中で、使徒パウロの死体と仰せになりながら、頭が切られてうつ伏せている死体を御見せになられた。イエス様が改めて御説明なさったところ、「パウロは生きている時、私を証言するために様々な苦痛と苦難を経験したが、ついにはああして殉教した。あなたもパウロのような試練があるとしても私の御業のため、様々な苦に耐えねばならぬだろう。」と仰った。

1974年1月10日、祝福中断をお願い申し上げる

先の僕がずっと私を苦しめてきたので、私はイエス様の前で彼の使命を取り消して下さることをお願い申し上げた。イエス様は、「一度に取り消すと私の栄光に支障を来すこともありうるので、徐々にやらなくてはならない。」と仰った。

1974年3月、主イエス様のお怒り

イエス様が先の僕の御業に関して残念な気持ちを仰るには、「私は前者の御業に惜しむことなく声援と恩恵を与えた。しかし、あのように恩恵を受けた多くの羊たちはこれといって私のためになってくれないとは。」とお怒りになられた。

1974年10月、二度は騙されない

先の僕からは足蹴にされて、社会からは迫害され、誰一人私を認めてくれようとする者はいない中、オリーブの木の御業があまりにもみすぼらしくて私はある日イエス様の御前で申し上げた。「主イエス様、このようにオリーブの木の御業がみすぼらしいと誰が私の後について来るでしょうか？とても辛いです。先の僕を通して行われたように能力をお注ぎくださっても、人々が来るかどうかも怪しいとは。荷が重すぎて到底できるとは思えません。」
イエス様がその日の夜、異像の中で、信仰村(シナンチョン)露求山(ノクサン)の屋外集会(1958年6月30日～7月5日)の場面を御見せ下さり、彼らに主ヤハウェ様の御業が

無視されたが、数年後私を通して改めて復興される場面を御見せになられた後に仰せになられた。「私が前は私の血を惜しむことなく与えていた。しかし、もう二度とはだまされない。もうこれ以上私の血が足蹴にされるのを放ってはおけない。これからはあなたたちが私の指示を成し遂げれば、その後に与えよう。」と仰った。

1974年、イエス様の赦免権

イエス様が私に欲しいものを与えようと仰り、何が欲しいのかとお尋ねになられた。それで、私が、「イエス様が持つ権限の内、最も大きなものは何ですか?」とお伺い申し上げると、「私が持つ権限の中では、何と言っても赦免権が最も大きい。」と仰った。私が、「そうでしたらその権限を主の僕がイエス様の代わりに行使できるように御許可を下さいませ。」と申し上げると、「それなら、あなたを通してその権限が成されるようにしよう。」と仰った。

1974年、二千年を待つ

エデン聖会を始めてから、思ったより大変なことが多く起こり、どうしてもこのようなやり方しかないのか、と複雑な思いでいた。そんな中、イエス様が異像の中で私に仰った。「あなたはあなたの時代に勝利者の仕事をするが、私は勝利者が現れるのを二千年近く待ち続けて来たのだ。」と主ヤハウェ様の御業の重要性について仰せになり、困難でもオリーブの木の御業をやり遂げよと仰った。

1975年5月、たった3年で

異像の中で、イエス様が仰るには、「先の僕が正直で情熱的に私の仕事をしたのは3年にすぎない。」と仰った。先の主の僕は1957年より好条件、悪条件といった言葉を上げながら主ヤハウェ様の摂理を歪曲した。

1975年6月4日、火の壁

昼間、少し目を閉じてうつらうつらしていたが、いつの間にか遠くから明るい光が現れたかと思うとイエス様が輝く白い服をお召しになってお見えになられた。「あなたが尊敬して従っていた先の僕を私が今日まで恩恵を与え僕と認めて、彼を火の壁で守ってあげたようにあなたを火の壁で守ってあげよう。」

1975年、悪霊に勝て

イエス様が異像の中で、肉としての生命がある間も悪霊の支配を打ち払いながら生活する人でなければ、霊の世界でも悪霊に勝てないと仰った。

1976年、信仰人の三つの姿勢

イエス様が異像の中で、私に従う者の姿勢について御教え下さった。「あなたに従う人たちは三つの種類に分かれる。一、真理に目覚めて感謝しながら信仰に従う人。二、あなたの前では勝利者と言いながら、いないところでは自分勝手に生きる人。三、自分に利益があるため、あなたに従いながらあなたを尊敬するふりをする人だ。」このように三種類に分けて接するようにせよと仰せになられた。

1978年10月、苦に耐えよ。

私が困難をこうむり気落ちする時、イエス様は異像の中で御言葉をかけてくださった。「以前、私があなたに、私が十字架を負ったのとピラトの広場で苦痛をこうむった困難を見せたではないか？あなたも今被っている困難を経て苦痛があったとしても我慢して耐えるようになさい。」私はその言葉を聞いて勇気を出して再び精一杯頑張れるようになった。

1982年3月27日、夫人の指定

一度は異像の中で、未婚で過すと時間が経てば経つほど我々の御業に難しい問題が

多くなり、主の僕である私の立場が困難になっていく場面を御見せになり、その困難を少しでも軽くするために結婚をしなければいけないという暗示があった。
数日後、地方巡回をしていた最中、27日には大邱(テグ)で礼拝を終えて、イ・ジョンオ執事の家で寝た。異像の中で、イエス様が私の結婚相手を御指定になられた。結婚問題で指示が降りてきたのは32歳の時と数日前に続き、今回が三度目だった。

1982年4月4日、情が生まれるだろう

イ・ジョンウン勧士に連絡し、私が住んでいるところにイ勧士の家族が来るようにして、イ勧士の娘に異像の中で授かったイエス様の御指示を知らせた。その夜、彼女が果たして私に内助の功を尽くし主の仕事に役立つものか、また彼女が私の心を満たしてくれるかについて懸念しながら眠りについた。
その夜、イエス様が異像の中で仰るには、「一緒に暮らす内に情が生まれるだろう。」と仰り、彼女が私の適性に合うはずで、円満によく内助の功を尽くすだろうから心配しなくてもよいと御教授くださった。

勝利者イ・ヨンスに対する編集者の証言

広報部長ユン・サンハク

イ・ヨンスは聖書に預言された二本のオリーブの木の内、二番目のオリーブの木であり、イエス様の二人の証人の内の一人である(ゼカリヤ書4:14、黙示録11:3-4)。オリーブの木は主ヤハウェ様の摂理で最後の時に登場するように予定された主ヤハウェ様の僕である。イ・ヨンスは1970年4月に初めてヤハウェ様を謁見し、その後3年にわたり異像を通して主ヤハウェ様とイエス様より三日毎にオリーブの木としての仕事ができるように御教えを賜った。その後にも彼は数多くの異像を拝見した。この本は彼が見た異像の一部であり画集として製作し紹介するためのものである。

オリーブの木を予言した旧約時代の預言者はゼカリヤで、彼は今から2500年前に異像の中で、すべて金で造られた燭台の左右にある二本のオリーブの木からすべて金で造られた燭台に金の油が注がれるのを見た(ゼカリヤ書4:3、12)。ゼカリヤはこれがどのような意味なのか分からなくて天使に質問をした。すると天使は当時の総督のゼルバベルが山を削り平地を作り、聖殿を建築した話をしてくれた。ゼカリヤはその話を聞いても理解できず、天使に二本のオリーブの木が何なのかについてもう一度尋ねた。その時、天使が二本のオリーブの木は二人の油そそがれた者であり、全地の主のかたわらに立つ者だと教えてくれた。(ゼカリヤ書 4:14)

主ヤハウェ様が1974年、勝利者イ・ヨンスに、「あなたの時代より2500年前、私が私の若き僕ゼカリヤに言ったことがあなたの時代に成し遂げられる。」と仰った。それはゼカリヤを通して預言したオリーブの木の御業がこの時代に成し遂げられることを教えて下さったのだ。

主ヤハウェ様がオリーブの木を必要となさる理由はすべて金で造られた燭台に金の油を注がれるためである。象徴的

にすべて金で造られた燭台は聖徒を表し、金の油はイエス様の尊い血を意味する。すなわち、オリーブの木は聖徒たちにイエス様の尊き血を伝える人物なのである。イエス様は黙示録に、二本のオリーブの木が水を血に変えることができると仰ったが(黙示録11:6)、これもオリーブの木がイエス様の血を伝えると御教授くださったことだ。

イエス様は十字架を負い、天に昇られた後、その対価として主ヤハウェ様の右の玉座に座り天を治める権勢を賜られ、その時、ヤハウェ様の右手にお持ちであられた七つの封印で封じてあった巻物をお賜りになられた(黙示録5:7)。その巻物には主ヤハウェ様の摂理が書いてあり、その巻物を読んだイエス様はヤハウェ様の御旨を完全にお分かりになられた。

その結果、イエス様は最後に二本のオリーブの木を立てなければいけないことをお分かりになられた。それで、イエス様は黙示録で二本のオリーブの木をイエス様の証人として立てると預言なさった(黙示録11:3-4)。イエス様はオリーブの木として御使いになる人物をお選びになるため、勝利者が現れる時をお望みになられた(黙示録2章、3章)。勝利者はイエス様が御課しになられた試練に打ち勝った者を意味し、イエス様は彼にオリーブの木としての使命をお任しになられて、最後の時に成就されねばならない主ヤハウェ様の御旨を御進行なさるのだ。その御旨とは正に主ヤハウェ様の軍勢を完成させることであった。

天の兵士は十四万四千人であり、最初の殉教者アベルから始まりオリーブの木の時代に輩出される資格者まで延々6千年にわたり輩出される。主ヤハウェ様は旧約時代に預言者を通して御言葉を下さり、その御言葉を守って殉教した者の額に主ヤハウェ様の名の印を押された。そして、新約時代には聖霊を授かりイエス様を証言している中で殉教した者たちの額にイエス様が自分の名の印を押された(黙示録20:4、14:1)。そして今の時代にはイエス様がオリーブの木を立てて、彼を通して主の摂理を教え、その教えを守る者の額にイエス様の名の印を押されている。

オリーブの木がする仕事は、彼に従う者に天の兵士の資格を与え、彼らの額にイ

エス様の印を押され(黙示録7：3)、彼らを鋭い鎌で刈り取って主ヤハウェ様に捧げることである(黙示録14：16)。印を押されるためには実った穀物(アルゴク)にならなければならず、この時の穀物は聖殿で熟すようになっている(黙示録14：15)。その聖殿が今の時代にヤハウェ様が勝利者イ・ヨンスに建築することを御指示なさったアルゴク聖殿である。

アルゴク聖殿は人類の歴史上、ヤハウェ様が直接建築の御指示をなさった四番目の聖殿で、その一番目はモーゼの幕屋で、二番目はソロモンの宮、三番目はゼルバベルの宮だ。四の数字は地上で成就されねばならない主ヤハウェ様の御旨を表すことであり、それは十四万四千人の軍勢を完成させることを意味する。従って、勝利者イ・ヨンスがすべき事は、アルゴク聖殿で羊たちに主ヤハウェ様の御旨を教えて、彼らが天の兵士になれるように作り上げて穀物を輩出することである。それで、主ヤハウェ様が御指示なさったその数を満たすと、地上で成し遂げられた条件を持ってイエス様が天で願われる事を成就できるのだ。

19世紀末、韓国の地にキリスト教が入ってきてから、韓国では多くの殉教者が輩出された。主ヤハウェ様の御旨によりイエス様がオリーブの木を立てられた時、最も実りの多い国が韓国だったのだ。それで、イエス様は韓国に二本のオリーブの木を立てられることをお決めになられて、日本帝国主義に支配された時に数名に預言をなさった。

イエス様は6.25戦争(朝鮮戦争)中に二本のオリーブの木を立てた。当時イ・ヨンスは9歳で、イエス様のことは知らなかった。しかし、イエス様は一番目のオリーブの木と共にイ・ヨンスにも油を注がれ、彼を第二のオリーブの木としてお選びになられたのだ。その後、イエス様は彼を様々な鍛錬の中で訓練させながら、将来、第二のオリーブの木としてお使いになるための御準備をなさって来られた。

イ・ヨンスは1942年生まれで、16歳の1958年に一番目のオリーブの木が建てた伝道館に通い始めた。1962年、20歳で伝道館の伝道師として発令されてから6年の間、伝道師として活動していたが、1968年に休職した。

イエス様は先の僕が神の仕事を正しく

したのは3年しかなかったと、イ・ヨンスに仰せになられた。主ヤハウェ様は予定より早く二番目のオリーブの木を立てようとした。しかし、一番目のオリーブの木が彼に主ヤハウェ様の御業を引き継ごうとしなかったので、主ヤハウェ様はイ・ヨンスに第二のオリーブの木の御業を別途行うことを御指示なさった。彼は主ヤハウェ様の御指示に従い、1973年にエデン聖会を始めて様々な職業を転々とし、短い間芸能界にもいてアルバムも出したり、映画にも主演で出演したりした。

1970年4月、イエス様が彼のところにお越しになり、彼はイエス様と一緒に主ヤハウェ様に会いに行った。彼は、主ヤハウェ様の世界で主ヤハウェ様よりヤハウェ様の僕としての御使命を賜り、今後建立される神聖な都を御見せ頂いた。

その日から彼は数多くの異像を見た。ある異像ではあちこちが空欄になっている聖書があり、その空欄から見える映像より主ヤハウェ様の隠された摂理に対する御教えを頂いた。彼は「小羊のいのちの書」に自分の名が記録されてある場面を見て、イエス様より罪をお洗い頂き、また自分を通してイエス様の尊い血が伝えらえるという御言葉を伺った。

その後、悪魔たちが彼を訪ねてきて苦しめられたり、彼は悪魔の世界に連れて行かれて大王悪魔も見た。

イエス様は先の僕を通して恩恵を授かった者たちが9万人におよぶことを彼に御教え下さり、その中で主ヤハウェ様を探し求める者を救い出すようにと仰られた。

イエス様は悪魔の手が彼には届かないように火の壁でお守りくださり、聖書に預言された勝利者としての使命を果たせるよう御導き下さっていらっしゃる。

彼は主ヤハウェ様の御指示により1973年11月17日、東大門区典農(ジョンノン)洞で「エデン聖会」を始めた。彼は1975年3月に東大門区昌信(チャンシン)洞、1975年9月に西大門(ソデムン)区大峴(テヒョン)洞を経て、1977年に東大門区祭基(ジェギ)洞に聖殿を建てた。

エデン聖会がどんどん発展すると、周りの讒言でイ・ヨンスは1979年に拘束された。しかし、主ヤハウェ様はそのような状況をただそのまま放置して見ていらっしゃるのではなく、彼が害を被ること

がないようお守り下さった。主ヤハウェ様は監獄にいる彼に、「禍を転じて福と為す。」と仰せになられた。

1980年4月、監獄にいる彼に主ヤハウェ様が、「ソウルから1時間余り離れた閑静な所に私の聖殿を建てて私に栄光を捧げるのだ。」と仰り、今後の聖殿の建築計画をお教え下さった。この聖殿はこれから、『かまを入れて刈り取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時が来た。』(黙示録14:15)という預言が成就される場所であり、穀物を収穫して天国に捧げるという意味で「アルゴク聖殿」と名づけられたのだ。

以後、異像の中で、主ヤハウェ様が彼に聖殿の姿と周りの環境についてお見せになられた。聖殿の鐘楼の上には香が立ち上るのを象徴する香の煙があり(黙示録8：3参考)、聖殿の前方には十字架があり、十字架の周りには最後の時に災難を起こすためにラッパを吹く七つの天使がいる(黙示録8：2参考)。また、その両側にはオリーブの木をくわえて飛んで来る二羽の鳩がいる。鳩は聖霊を象徴する(マタイによる福音書3：16参考)。

1985年9月、アルゴク聖殿を建築せよというヤハウェ様の御指示に従い、勝利者イ・ヨンスは京畿道加平(カピョン)郡清平(チョンピョン)面に山を購入して聖殿建築を完成し、1987年11月8日に献堂した。1987年12月には主ヤハウェ様が彼に、「条件が困難な中、私の聖殿を建てようと苦労が多かった。これからあなたを尊貴な者としよう。」と御約束下さった。その後にも、主ヤハウェ様が聖殿に附属された建物を一つずつ順番通りに御見せになられながら、建築を進めるように御導き下さっていらっしゃる。1990年5月、ヤハウェ様は、「あなたに従う羊たちがこの聖殿を経て私の国に入ってくるだろう。」と祝福の御言葉を下賜なさった。

イ・ヨンスは継続して主ヤハウェ様の御指示に従い、アルゴク聖殿境内に総合グラウンド、大型公会堂ホール(文化の殿堂)とホテル(ホテルホワイトストーン)などを建てているが、これは世の中に主ヤハウェ様の御業を知らせるためである。

2012年、全20冊のイ・ヨンスの説教全集『エデンのこだま』が出版され、2014年には、異像の中で見た様々な場面が絵として描かれ『文化の殿堂』に展示さ

れることにより、主ヤハウェ様の最後の摂理がここで成就されているということを世界に伝えている。

主ヤハウェ様の御業についてより深くお知りになりたい方はイ・ヨンスの説教集と『イエスの証人、二本のオリーブの木(ユン・サンハク、2013)』を読みになられることをお薦めします。

この本の全ての内容についての責任は編集者にあります。お問い合わせは info@edenholychurch.or.kr のemailアドレスの方にお願い致します。

アルゴク聖殿とその附属の建物

周鉢峰(ジュバルボン)から見下ろしたアルゴク聖殿の境内
(左側の下に『アルゴク聖殿』、右側に『文化の殿堂』)

1

2

3

4

5

(番号は表紙の内側の案内図の位置をご参照)

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

地方教会

ソウル教会

江華(カンファ)教会

南楊州(ナンヤンジュ)教会

盈德(ヨンドック)教会

原州(ウォンジュ)教会

光州(グァンジュ)教会

錦山(グムサン)教会

大邱(デグ)教会

大田(デジョン)教会

釜山(プサン)教会

富川(プチョン)教会

仁川(インチョン)教会

一山(イルサン)教会

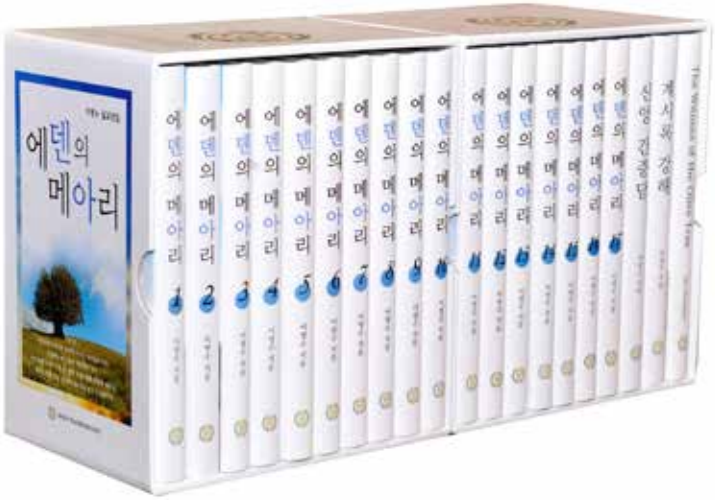
天安(チョンアン)

清州(チョンジュ)教会

春川(チュンチョン)教会

洪城(ホンソン)教会

エデン聖会関連書籍



イ・ヨンスの説教全集『エデンのこだま』(2012)
説教集1巻～16巻、『天国はあるのか(17巻)』、『信仰証言集』、『黙示録の講釈』、
『The Witness of the Olive Tree』等、全20巻で構成されております。

『勝利者とオリーブの
木の原理』
パク・サンソク
(2001)

『みこころが地にも行われ
ますように』
キム・ヘソン
(2007)

『日曜学校課程』
日曜学校
(2012)

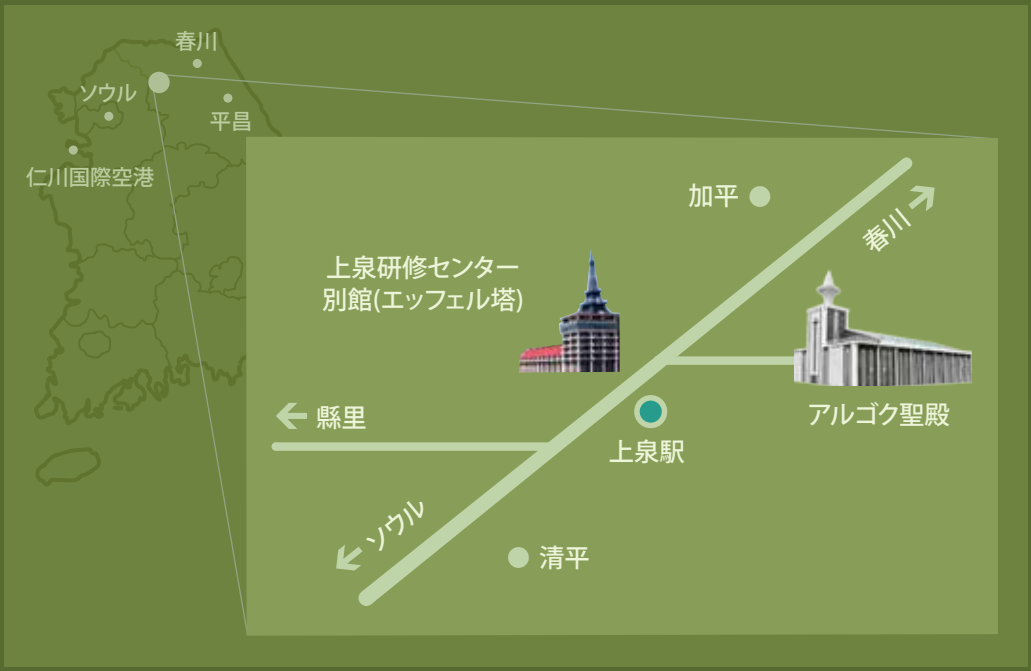
『イエスの証人、二本の オ
リーブの木』
ユン・サンハク
(2013)

アルゴク聖殿の境内案内図

1 アルゴク聖殿
2 聖殿第1別館
3 聖殿第2別館
4 聖殿第3別館
5 コテージ
6 文化の殿堂
7 Mパーク
8 ドリームガーデン
9 ドリームキャッスル
10 マグノリア・マンション
11 ソリッドロック・マンション
12 エデン総合グラウンド
13 エデンゴルフ練習場
14 エデンアパート
15 ホテルホワイトストーン
16 聖殿別館
17 エデンガソリンスタンド
18 ウエディングホール
19 ボンニョ食堂
20 エデン農産物センター
21 エデンスポーツタウン
22 加平松の実韓菓
23 上泉エデン幼稚園
24 上泉神経科
25 上泉研修センター
26 上泉研修センター別館
(エッフェル塔)

アルゴク聖殿の交通アクセス

住所：京畿道加平郡清平面クンメコル路189(上泉(サンチョン)駅の付近)
お電話：031-582-7273



車によるアクセス

· 46番京春(キョンチュン)国道ーエデン農産物センター・サービスエリア(春川(チュンチョン)方面)

バスによるアクセス

· 清涼里(チョンリャンリ)駅乗換えセンター1番乗り場ー1330ー2、1330ー3のバスに乗車ーチョオクトン(エデンスポーツタウン)で下車
· 蚕室(チャムシル)駅の５番出口で7000番のバスに乗車ーチョオクトン(エデンスポーツタウン)で下車

電車によるアクセス

· 京春(キョンチュン)線上泉(サンチョン)駅で下車ーアルゴク聖殿のシャトルバスをご利用
(アルゴク聖殿のシャトルバス乗り場：031-584-8126)